

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル TEL113-0033
TELEPHONE 03-3812-6664
FACSIMILE 03-3812-6828

特集 「日本海の交流・北前船の風土デザイン
日本海基準を求めて」北陸

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集:「日本海の交流・北前船の風土デザイン

—日本海基準を求めて— 北陸

- | | |
|-------------------------------|----|
| 1. 特集に当たって | 1 |
| 2. 都市文化研究「北前船と越の風土デザイン」 | 2 |
| 3. 越前三国湊 | 4 |
| 4. 北前船回船問屋群のまちなみ整備とまちの活性化策の展開 | 6 |
| 5. 地域遺伝子を活かした景観づくりを読む | 8 |
| 6. エキスカーション | 9 |
| ●第16期定例総会 | 10 |
| ●発表会& JUDI賞 | 12 |
| ●事務局より | 14 |

「日本海の交流・北前船の風土デザイン—日本海基準を求めて」北陸

特集 1

特集に当たって

横山 裕

Yutaka Yokoyama

(財)新潟観光コンベンション協会

新潟で活動する私は、街のつくられ方に関する情報の多くを、中央・東京から得ており、実際、都市環境の評価尺度はその情報をもとに決定されている。インターネット等により情報の受け取り方が大きく変化している現在においてもさほど変わらない。

北陸路を移動していると、日本海側の各街には中央・東京の情報からは得られない共通の雰囲気に目を魅かれことが多い。それは北陸だけでなく、東北の日本海側、山陰地方の街を訪れても感じる共通のものだ。しかしこれは私自身のことなのかもしれないが、そこで感じ得る共通のものを意識化せずに感覚的な印象、あるいはその場所毎の固有なものとして片づけている。日本海側共通の都市環境を形成する基盤要因として情報を蓄積していない。

実は続けて日本海側の北前船の寄航で栄えた港町を訪れる機会があった。昨年12月の都市環境デザイン会議北陸ブロック主催の福井フォーラムの際に訪れた三国の街、今年5月に北陸ブロック富山会議の際に訪れた岩瀬の街である。日本海に面し、北前船の寄航で富を蓄積した港町として、日本海の潮の香りとともにある街並みと街の歴史があった。と同時にその雰囲気はそれぞれの街独特の地域固有性ではなく、日本海に面する街の共通性を意識する体験でもあった。

今まで中央・地方という関係のなかで、地方都市は、その地方都市「らしさ」が強調されすぎ、もともとその都市が立地する地域における共通性については語られてこなかったのではないだろうか。今回特集を組むにあたり、北陸の風土としての共通性を浮かび上がらせることができれば、と考えた。その共通性を浮かび上がらせるることは、現在の日本の都市環境を形成する要因となる様々な規則や基準が本当に北陸の風土に適しているのか?改めて検証する必要性を浮かび上がらせることになるだろう。

例えば日本海側の多雪地域という気象条件は雁木という都市の空間を生み出した。雁木は、豪雪のなかでの隣近所とのコミュニティを確保する知恵から生まれた空間である。しかし土地の所有も含めその管理は、官地なのか、民地なのか、非常にあいまいな場所もある。その環境を管理・維持していく上では、全国一律の都市形成の基盤やしくみでは矛盾が多く、それぞれの街で個々の創意工夫、努力のなかで維持していることが実態といえよう。このような例はその他多く存在するが、北陸の風土デザインとして、本来北陸の地域性に立脚した暮らしの知恵から都市環境の創造を導きださなければならないはずである。

今回は北陸地域としての共通言語を浮かび上がらせるため、北前船の寄港地として栄えた港町に焦点をあてた。日本海はかつて今の状況では考えられないほど、船を使った、もの・ひと・ことの交流が盛んであり、その交流が街や地域を支える富を生み出していたことが想像できる。それは、日本国内だけでなく、日本海の対岸諸都市との交流もそうであったようだ。

新潟市は、来年4月1日に本州日本海初の政令指定都市になることが決定した。その過程のなかで政令市になることよりも、都市戦略的には、環日本海、東アジアに目を向け始めたことが重要な意味を持つ。かつて日本海を舞台に、繰り広げられた交流が生み出したもの、そのストックが、日本海側の都市魅力の創造を引き出すものといえる。そのためにも、北前船の港町の都市環境の共通言語を見いだしていくことが必要であり、そのきっかけに本号がなればと願う。

幸い都市環境デザイン北陸ブロックの4県は、まさに日本海に面するエリアの県として、日本海側共有の風土性と歴史的・文化的・経済的な共通項を見いだしていくことがブロック活動として重要なとなるだろう。

都市文化研究 「北前船と越の 風土デザイン」

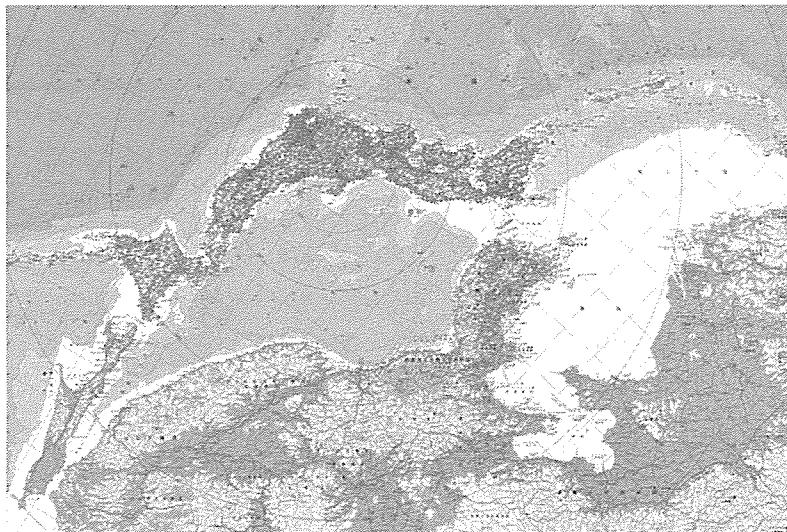
坂田 守正

Morimasa SAKATA
株式会社デザインスタジオ・ビネン

(1) 越の国と東アジア交易
北陸の地域特性は、日本海に面した越前（福井）・越中（富山）・越後（新潟）という共に「越」の地域名称が使われている。越とは日本書紀に「越」、古事記には「高志」の記述で、およそ5～6世紀の頃といわれている。越の国は東アジア交流と交易によって文明的発展を遂げた日本の中心的な地域であった。

古代大和政権統一の國造りと共に、越前の國から繼体天皇即位（507年）より巨大広域ネットワークの文化が存在していた。越の国はすでに1500年の歴史があり、加賀（石川）を含む4県を総称して「北陸」と呼ばれるようになった。1500年の歴史起源は奈良・藤原・平安の歴史につながり、北陸の豊かな漁撈文化と農産物など畿内を支えた貢献物の生産場であった。

特に、日本海における対馬海流とりマン海流の流れは、豊かな漁場と共に、湊町を形成した。若狭湾・加賀・能登・富山湾・佐渡・新潟は日本海航路の拠点になり、後の「北前船」によって北海道から瀬戸内海をめぐる大阪（堺）へ物流輸送のネットワークができた。



日本海と東アジアの位置関係を示す「通称逆さ地図」

この地図は富山県が作成した地図を転載したものである。（平6 総使第76号）

(2) 日本海ネットワークと北前船文化

北前船は、江戸時代から明治の中期まで栄え、西廻りと東廻りの廻船ルートによって、地域特産の交流と交易を担っていた。物流とともに、人・モノ・技術・文化など地域に開かれた交流の歴史がある。

港は、海の文化交流だけでなく、森の文化と農村文化をつなぐプラットホームである。それは河川を往来しながら地域循環型社会のネットワークである。地域の固有文化とともに、蝦夷・東北・北陸・山陰・九州・瀬戸・近畿へつながる西廻りの開かれ

た交易によって豊かな日本の経済と文化の交流拠点になっていた。これは陸の東海道五十三次のような海のネットワークがあった。そして日本の美しい西海岸である。やがて、海の道から陸の道へ、鉄軌道や車による文明的都市構造が国土総合開発によって、全国均一化と画一化の同じような地域が開発される。

(3) 地域に存在する固有な文化技術

越の国や北陸は「同じ」ようで「違う」も明確に存在する。同じは共通認識となり、違いは個性的で魅力になりうる。20世紀の日本経済は「同じ」と「平等」を政策化したもので、日本の国土形成において税の分配論理は当然のように平等という社会主義的高度成長の基盤をつくり成功した。実は同じとは資本主義経済にとって分割と細分化を進展させる政策的技術論である。建築工学的にも同じはコスト低減できるが、その細部はモジュール化することによって規格化できる。この構造は人間社会も同じモジュール化と規格化することが可能になる。

一方、違いは個性的で魅力的な建築物を創造でき、おもしろい構造物が可能になる。そして、新しい調和の美も創造することが可能になる。9・11世界貿易センターのテロによる事件は、同じものを積み上げることによって一度にグランド階まで壊れ去った。同じは、同じ空間と時間において一瞬に崩壊する。

地域内には本来存在する地域力と場所のエネルギーがあって、強引に同一化と均一化することは元来無理がかかる。

日本海と言った時、同じ海のようであるが、地底、海溝、地形、波の力、風の力、潮流など微妙に異なる。この違いを一つ一つ船頭は経験的に知っており、季節の風と方位によって風の名前をついている。風を見極め、風の動きに臨機応変に対処しながら航行する。船底一枚地獄と天国と言われるように危険と豊かさは表裏一体にある。港町のあり方も河川、運河、そして、風の方向によって建物や道が整備されていた。屋根の勾配、窓の位置など実に匠な技を要求される。その土地のことを知りつくした技術者によって固有な文化技術となっている。外からは見極めのつかない技術と知的生産が存在している。同じのようであるが、違うところが魅力的である。

日本海側に存在する港町はこうした同じと異質が混在しながら歴史の記憶に町並みが形成されてきた。



「北前船主の館右近家」南越前町（旧河野村）

(4) 海の文化と川の文化

本来、日本の地域文化は、海の文化と山の文化を河川によって構築された環境調和型の持続的で循環的なシステムであった。しかし、近代化は、文明的で西欧社会型を目指す資本主義経済の構造化された都市計画となつた。そこにはヘゲモニーや政治的霸権が存在する。この権力構造は見えるようで見えないパノプティコンシステムになっている。つまり文明的都市の構造は、機械化された資本主義経済であり、「時間」と「空間」の細分化と分離化によって効率的に処理されていく。そこには日本的な「場所」概念がなく、地域内に存在していた場所は人々の記憶から消えていった。

(5) 歴史の記憶と風土性

日本海に面した北陸の歴史は、越の国にはじまり北前船によって、隆盛を極めた風土性がある。歴史の記憶は地域固有な文化の「風土性」と呼ばれるもので、その地域の地形・地質・気象・植生・動物と人間の営む文化によって遺伝子のように連関しながら継続的で循環システムとなってつながりあっている。同時に海の道は、川の道であり山の道につながる。海の文化と同じ川の文化を大切にした日本の文化技術は灌漑や内水面そして水力発電の文明を築いてきた。しかし、今日の地域性や風土性は西歐的な分離と細分化の競争原理によってタテ割りの中に分断されている。

(6) 主客非分離の環境文化

鈴木大拙の「東洋的な見方」によれば、西歐的意識の根底には「divide and rule」（分けて制する）といった二元性があると説いた。東洋的には主客非分離の日本的な思想哲学があり、西田幾多郎は「絶体矛盾の自己同一」という。そこには禅的な自己存在を解いて、分離されない自己が在る。風景を見る立場において見るものと見られるものの間に主語主体とは異なる述語的主体性が日本の文化基層

にある。日本語は述語主体で主語を包摂して語る。西欧社会と根本的に異なる哲学体系があった。このことは都市を文明論として語り尽くせない日本の都市文化が存在する。高浜虚子は「俳句への道」に於いて「客觀写生」と表現し、「対象物と作者との距離が近くなつて来て、自分の心に感ずるような形や色が自由に描けるようになつて来る」（※1）という。見方を変えると、そこに存在する場所や風景がわたしたちに働きかけてくるアフォーダンスのようなポエトリー（創作）がある。

俳句の世界は自然と人間の共創原理が見られ、そこに棲み、生きる人々の趣があつて、実に楽しい創作の世界が拡がっていく。そして、日本のまちづくりは文学的であった。

(7) 都市文化と場所文化

現在の都市論は港湾、都市、農村、河川、山林といった分離された環境計画になつてゐる。

近代化を目指した都市文明的で資本主義経済社会のあり方は「時間」と「空間」の細分化と分離の思考哲学に陥る。そこには「場所」概念ではなく、西田幾多郎の創起した「場所に於いて在る」自己の存在を再起されなければならない。つまり、公と私、自と他に分離できない日本哲学の都市論を構築すべき時期を迎えている。

都市の分節化は人間の分断化につながり、環境そのものの分断化につながる。西歐的細分化の原理は便利であればある程リスクは増大する。また経済学は時間の短縮化と空間の細分化を進めることによってリスクは増大する。リスクを回避するために考えられたシステムが逆にリスクを増大させるという経済学につながる。そうではなく、海の文化・川の文化・山の文化を環境的な循環型の持続的なつながりとして考えない限り豊かな地域は甦ることはないとされる。

今、越の国や北前船の地域間交流を学ぶことは、地域の固有な文化や循環型社会の持続的な発展を考える視点としても歴史から学ぶことが多い。現在のまちづくりや都市環境を考える視点としても「時間」「空間」「場所」のリアリティが存在しているものと考える。

■ 参考文献

西田 幾多郎『善の研究』岩波書店 1950年

鈴木 大拙『新編 東洋的な見方』上田 開熙編 岩波書店 1997年

『西田幾多郎哲学論集』～場所・私と汝 他六篇 上田 開熙編 岩波書店 1987年

■ 引用文献

※1 高浜 虚子『俳句への道』岩波書店 1997年 P35

越前三国湊

北前船で繁栄した歴史的な遺産を生かして始まる街づくり

玉森慶三

KEIZO TAMAMORI

株式会社 ライトスタッフ

1. 九頭竜川河口に成立した港町

(1) 港町三国の歴史性

1) 対外交流の拠点として成立した港町

福井県は、明治維新以前、越前国と若狭国と呼ばれていた地域で、京畿にとって一番手前にある後背地で、大陸と対峙する日本海側のほぼ中央に位置する地勢にあります。県内の小浜、敦賀、三国、いずれも舟運の流通拠点として古くから栄えて来た港町で、小浜は、大陸文化の玄関口として海のシルクロード終点と呼ばれた港町。敦賀は、8~9世紀に日本との交流が最も多かった渤海国の渤海使をもてなした「松原客館」がもうけられた歴史のある港町です。

2) 越前平野の莊園開発と九頭竜川

三国湊も、敦賀や小浜と同様に対外交流拠点として、また畿内の勢力の北辺の蝦夷攻略の基地としての重要な位置を占める港町であったと想像されます。しかし、三国湊が大きく繁栄したのは、越前平野の莊園開発が進み、東大寺等の莊園米の積出港としての機能を發揮するようになってからだと思われます。白山山系を源流とする九頭竜川は、稻作に欠かせない一年中枯れる事のない豊富な水の恵みと舟運による莊園米等物流に大きな役割をはたし、河口の三国湊の繁栄をもたらしてくれたのです。

3) 舟運ネットワークと商業の隆盛

奈良・平安時代の東大寺莊園、興福寺・春日社領、鎌倉時代の比叡山米など畿内の米蔵としての越前平野の役割は益々重用視され、九頭竜川河口の三国湊はその物流拠点として繁栄して行きました。さらに、中世になると、日本海沿岸の直江津や博多、敦賀、小浜などとともに商業が発達して、西回海運の航路などの舟運ネットワークも整備されて行きます。戦国時代の朝倉氏が越前をおさめたときには、唐船が来航するなど三国湊はかなり広域な舟運ネットワークを持っていたと言われております。さらに江戸時代には、北前船が頻繁に出入りする「北国七湊」の一つとして繁栄を迎え、福井藩城下町の外湊として交易、商業の中心地として位置づけられ、商人の町として繁栄してきました。このころの三国湊の北前船は、日本海沿岸や蝦夷地ばかりでなく、瀬戸内海や九州までも進出し、多くの富と先進の文化を三国にもたらしてくれました。

4) 海運から陸運へ 三国湊の衰退

明治中期、北陸線が開通したことにより、三国湊のもつ役割は大きく変わって行くことになります。交通体系が海運から鉄道を中心とする陸運へと変貌することにより、港を基礎とする商業、廻船業が衰退して、街全体の活気をなくしていくことになります。さらに、海運の中心が日本海から太平洋に移り、船舶の構造が帆船から汽船に変わったことで、大汽船の来航に不適当な三国港は、国内沿岸航路の小さな港に転

じ、さらに漁港として取り残されて行きます。

(2) 三国湊に残る北前船の遺産（遺伝子）

1) 商人の街の心意気「三国まつり」

北前船の繁栄を今に伝える三国湊のお祭り、毎年5月20日は三国神社の例祭です。中でも呼び物は約7メートルにも及ぶ武者人形の山車（三国ではヤマとよぶ）行列です。町内ごとに全部18基の山車があり、当番の町内の6基の山車が笛や子供の太鼓、お囃子・三味線とともに勇壮に古い港町の細い道を一日中練り歩きます。正月がすぎた頃から子供たちのお囃子の練習が始まり、大人たちは山車小屋にこもり、武者人形の制作に取りかかりこの日を迎えます。初夏の湊町は、近郷近在の人たちでごった返し、普段ちょっと寂しい古い町並みですが、この日ばかりは、活気に満ちあふれ、時代を超えたにぎやかでほっとする空間を体験することができます。

2) 私財をなげうち築いた「三国港突堤」

帆船から汽船に変わろうとしていた明治初期、三国港は九頭竜川が運ぶ土砂が河口を埋め、商船の行き來が危ぶまれていました。そこで、オランダの高い治水・港湾技術を用いて作られたのが「三国港突堤」です。この築堤は、エッセルやデ・レイケらオランダ人技師が指導し、「粗朶沈床」など最先端の技術と4年半の月日。延べ6万人を要した大工事により1885年に完成し、2003年には国の重要文化財に指定されています。ここで注目したいのは、築港の費用の大半を三国湊の豪商が捻出した事実です。築堤をした費用約30万円（現在の30~40億円）のうち、約8万円を6人の豪商が負担し工事を完成、しかも、突堤完成の翌年、6人のうち3人が破産、休業に追い込まれる悲劇となって、まさに財産をなげうってまで三国港改修に情熱を注いだと伝えられています。この話に心を動かされた地元では、有志が集まり「三国港突堤ファンクラブ」を結成。先人の生きざま（街づくりへの心意気）を現代のまちづくりに積極的に生かそうと活動を始めています。

3) 今も残る時代を積み重ねた湊町風情

川沿いの僅かな平坦地とその背後に広がる丘陵地とで構成される地形の上に、三国湊の市街地は、時代とともに河岸沿いに下流へと広がって行きました。明治初期には、蔵が川沿いに連続して立ち並ぶ独特の湊町の都市景観が、竹田川に面した三国神社周辺から、九頭竜川河口の手前までの約1.5キロメートルあまり続いて、背後に広がる丘陵地には湊の繁栄を示す遊郭や寺社が建ち並び、典型的な湊町の景観をつくり出していました。この湊の隆盛とともに形成された都市景観は、時代の経過とともに多少連続性を失ってはいますが、現在も近代化の波に飲み込まれることなく町のいたるところに残っています。

2. 三国の魅力づくり 街づくりの始まり

(1) 三国湊の歴史的遺産の活用

三国の町に残る歴史的な景観や三国まつりに代表される伝統行事などを活用して、元気な町を作ろうと言う機運が今三国で起きてています。坂井市に合併する以前の三国町が、古い町並みの整備を目的に進めた景観整備事業の導入や商工会が中心となって立ち上げた「みくに歴史を生かすまちづくり推進協議会」の活動が大きな起爆剤となっています。

旧三国町が行った景観整備事業では、町家や山車小屋の修景や「旧森田銀行本店」「旧岸名家」など古い建築物の改修保存などハード的な景観整備を行い、湊町風情の演出効果におおきな成果が見られ、伝統的な景観や町家の魅力を町民に再認識させたと思います。

また、「みくに歴史を生かすまちづくり推進協議会」の活動は、文化団体や観光協会や商工会、観光ガイドボランティア団体等の広範囲のネットワークをつくり、三国の魅力の再発見や魅力発信の原動力になったと思われます。

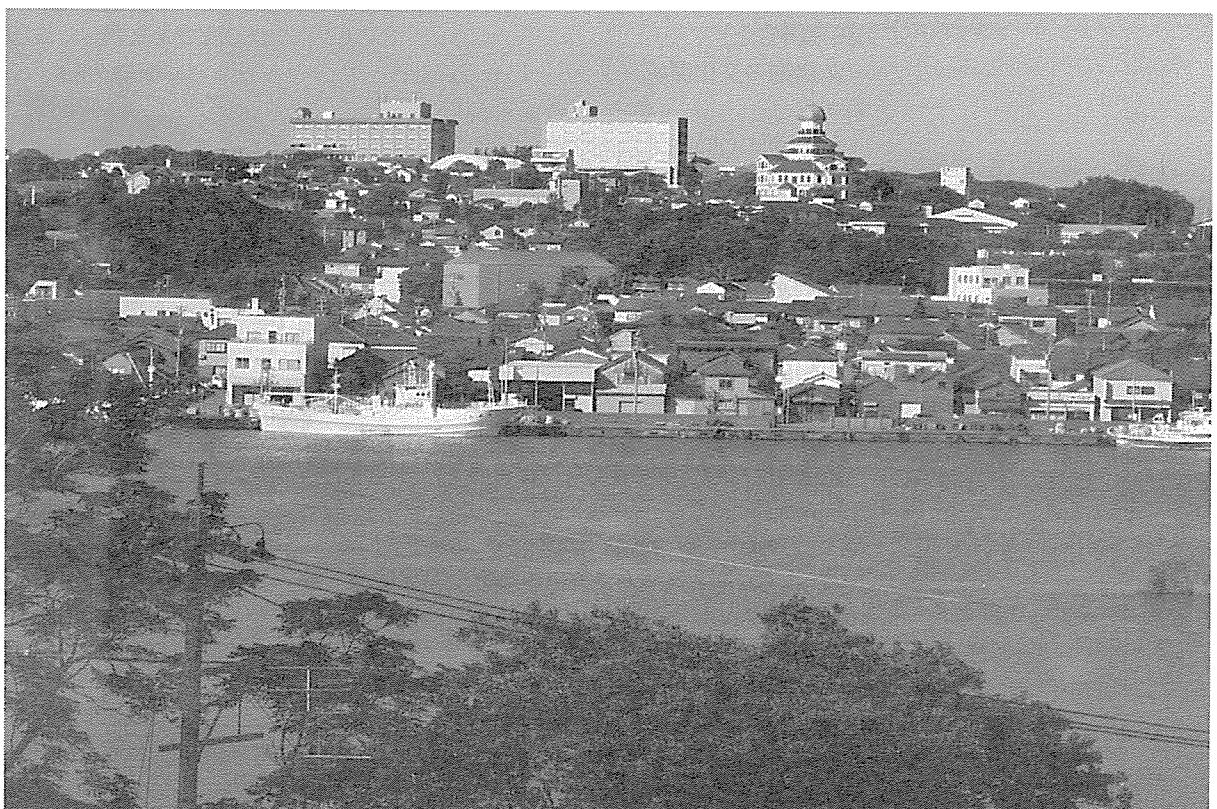
(2) 三国湊魅力づくりプロジェクト

三国町の「旧森田銀行本店」からジェラード「カルナ」までの50メートルぐらいの町並みが、マスコミにも取り上げられ福井県内で話題のスポットとして注目を浴びています。この通りの活気の原動力仕掛け人が、三国湊魅力づくりプロジェクト実行委員会のメンバーです。

実行委員会は、「みくに歴史を生かすまちづくり推進協議会」を母体生まれた団体ですが、あくまで営業活動を前提として、魅力づくりの実践活動を取り組んでいます。酪農家を中心となってつくるジェラードショップ「カルナ」を運営する(有)三国物語り。町内の老舗和菓子店主ら商業者を中心として「三国湊座」を運営する(有)三国湊座。ボランティアで魅力づくりのイベントのどを実施するNPO法人三国湊魅力づくりプロジェクトの3つの組織を作り活動を行っています。

(3) 始まったばかりの街づくり

真冬でも三国の町並みをそぞろ歩く一見観光客とわかる人の姿をみかけるようになってきました。今年の春以降は、土・日曜日になると、「旧岸名家」、今春正式オープンした「三国湊座」、ジェラードショップ「カルナ」の前には人だかりが出来る賑わいを見せています。プロジェクトのメンバーは、三国の魅力はもっともっとあると言っています。歴史の遺産や三国の自然、魚業や農業、三国に住む人がこれからつくり出す景観、みくにの魅力を生かした街づくりが始まったばかりです。賑わいを見せた通りの名前を付けたり、点で存在する貴重な町家の保存活用等、街づくりの課題は山積。ひとりでも多くの住民の参加と湊町ならでわの開かれた視点で街づくりを進めてほしいと思います。



北前船 回船問屋 群のまちなみ整備 とまちの活性化策 の展開

富山市東岩瀬の景観まち
づくりとその歩み

森 俊偉

TOSHIHIDE MORI

金沢工業大学建築系教授

(株) 森 俊偉+ARCO建築・計画事務所主宰
北陸ブロック

吉田 洋

HIROSHI YOSHIDA

(株) 森 俊偉+ARCO建築・計画事務所
北陸ブロック

北アルプスの諸峰より流下する急流河川(黒部川や姫川)と異なり、それより西方の白山山系などに源を発する諸河川の河口部には、北前船の頃からの風待ち港がよく発達してきた。(三国(九頭竜川)、塩屋(大聖寺川)、安宅(梯川)、美川(手取川)、伏木(小矢部川)、新湊(庄川)、岩瀬(神通川)など。

中でも九頭竜川や神通川が北陸の大河川だったため、三国や岩瀬の港は北前船の隆盛と共に活況を呈し、そして明治後年の鉄道敷設に伴う陸上輸送の発達と共に衰微した。

1. まちづくり推進啓発事業(岩瀬地区) の取り組み:

最初に平成11年度以来「富山市まちづくり推進啓発事業(岩瀬地区)」に参画してきた過程で提案し、地区住民と共に準備・実践した諸啓発事業の概略をご紹介する。

①「郷里エクスプローラ講座開催」の提案

当初より「市民民主導型のまちづくり」を意図したが、地元「まちづくり協議会」のメンバー構成が既決されていたこともあり、女性や若年者の参加が極めて少なく、ワークショップ的手法による始動が思いの外、進捗できなかった。

そこで、ふるさと学習を目的に構成した実践活動プログラム『郷里エクスプローラ講座』を先ず初期に提案した。

「郷里エクスプローラ講座」の構成内容を以下に示す。

ア. 岩瀬の街(並み)探検の心得(準備する物、5W1Hなど)

イ. 岩瀬の自然環境(地図(陸と海底)、水象、気象など)

ウ. 岩瀬の文化環境:(神社とお寺、公園と緑地など)

エ. 岩瀬の(古)地図(地図を眺めて自然と歴史の旅、など)

オ. 岩瀬の古老から話を聞こう(明治や大正からの古老は)

カ. 岩瀬の産業遺産を探検する

(産業資源、産業景観、産業・文化遺産など)

キ. 岩瀬の現在探検(町並みの自慢と不満、問題整理など)

ク. 岩瀬の未来探検(未来模型やまちづくりワークショップなど)

②「ミラクル=コスモス岩瀬探検」への進展

上記のプログラムの中で具体的に実践出来たのは、ア.とキ.で、その実施の中で、イ.~ク.を若干補う程度に終った。

その実践に際しては、先ず財団法人「まちづくり市民財団」のアウトドア・クラスマーム(平成12年度)の助成申請を行い、地元

への経費負担の軽減を図るとともに、女性や若年者の積極的参加を促す必要から、テーマ設定を新鮮なもの『ミラクル=コスモス岩瀬探検』に、修正・集約を図った。

この企画は70名余りの老若男女の参加を得て成功裡に終り、企画スタッフにも自信と展望と協働のノウハウを共有できる事業となった。

・街並み探検の様子:



③「岩瀬ワールド・ミュージック・フェスティバル」の試み

東岩瀬地区のまちづくり推進に際しては、常に女性や若者層の参加不足が、企画の前進を滞らせる主要因となった。

こうした停滞状況を打破する手立てとして、引き続いだ提案を試みたのが、『岩瀬ワールド・ミュージック・フェスティバル』開催である。この音楽祭は、平成13年7月と翌年10月とに、計2回のみ開催したが、地区外からの音楽ファンや若者も多数集うものとなり、初回から画期的な活性化イベントであるとの高い評価を得た。

またセットで開催したまちづくりフォーラムも盛況であった。

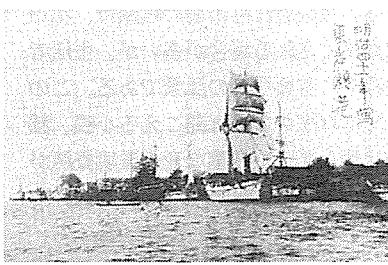
・フェスティバルのポスター



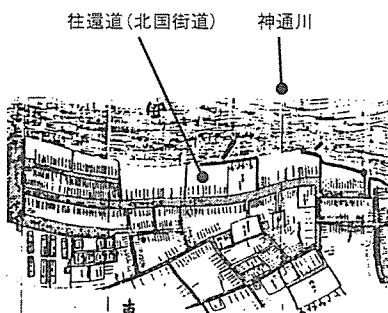
2. 東岩瀬の景観まちづくりの展開：

こうした活動の中で序々に醸成されたまちづくりへの取り組み意欲と住民の参加意欲を下地として、岩瀬の歴史的なまちなみ景観資源を活かしたまちなみの修景・保全と、こうした資源を活用したまちの活性化策への展開を図る方向性が人々の共通テーマとして認識されていったといえます。

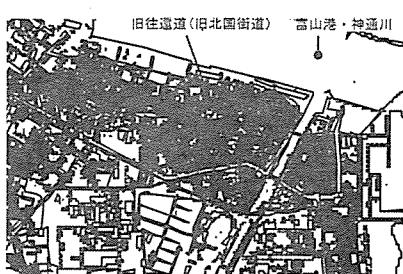
・かつての岩瀬港の様子：



・江戸期の東岩瀬の町の様子：



・現在の東岩瀬の町の様子：



・現在の東岩瀬の様子：



元々戦災によって街の多くを焼失した富山市において、東岩瀬の街は、数少ない歴史的な風情を留めている所でした。こうした限られた資源である伝統的な街並と風情を維持・保全しつつ、まちの賑い再生へと展開できればより望ましいという住民の思いの下に、この事業は進行しつつあるといえます。

実践的な方策展開は、街並修景については調査によって明らかになった伝統的家屋の造り（東岩瀬回船問屋型家屋、防火土蔵造り型家屋など）に応じた具体的な修景手法の構築、ルールづくり、補助制度づくりを図り、同時に、現代的な造りに置き換わっている一般建築物などについても具体的な修景方策を整え、下に、新しい施設利用プログラムを導入しつつ町屋の活用を図り、交流人口と滞留時間の増加を目指しています。

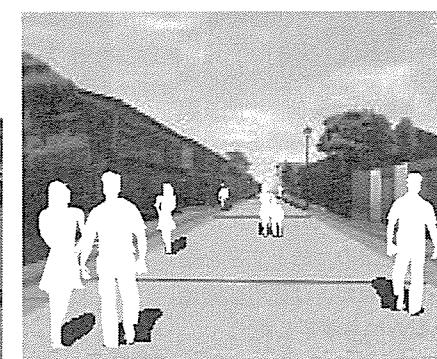
富山港線のライトレール化事業、及び岩瀬のもう一つの重要な資源である水辺環境活用策との一層の連携強化が、東岩瀬の街そのものをより魅力あるものに再生していくと考えています。

風情豊かな街並の再整備と住民の日常生活そのものを下地とした活気のある街区が形成されていくことを期待したいと思います。

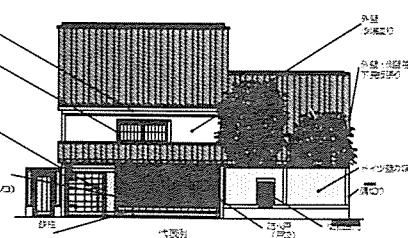
・回船問屋の並ぶまちなみ：



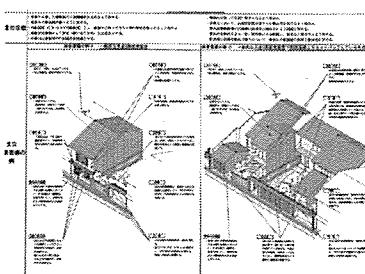
・まちなみの修景イメージ：



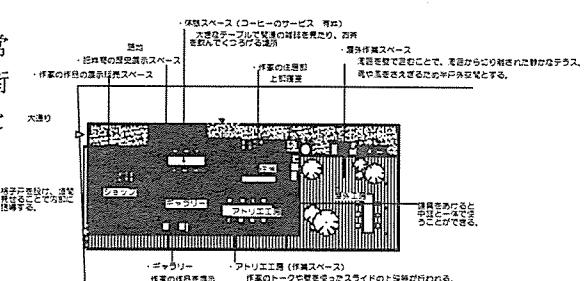
・東岩瀬問屋型の家屋の修景手法の例：



・一般的の家屋の修景マニュアル：



・町屋の改修整備プログラムの例：



・岩瀬地区の活性化資源の検討：



地域遺伝子を活かした景観づくりを読む

金沢都市環境デザインフォーラム 2006

円満隆平

Ryuhei ENMAN

金沢工業大学

地域を特徴づける風土、歴史、文化を地域の遺伝子とすれば、金沢は遺伝子が色濃く、脈々と受け継がれながらも、新しいものも取り入れようとしている都市の代表例と言える。金沢の遺伝子と景観づくりへの取り組みを紹介しながら、地域遺伝子の生かし方を考える。

日時：2006年7月15日(土)14時半～17時

会場：石川県教育会館

出席：173名 (JUDI会員70名、一般61名、学生42名)

司会：谷明彦会員（金沢工業大学教授）

1. 基調講演：水野一郎会員（金沢工業大学教授）「金沢の遺伝子と景観づくり」

(1) 金沢市の景観上の特徴

1) 平均年齢の城下町都市

「古都金沢」と呼ばれるが、まちの歴史は1546年の金沢御坊設置に始まり、世界的に見れば平均的年齢の都市である。

2) 丘陵先端立地都市

金沢城は犀川、浅野川に挟まれた丘陵の先端にある。2本の川は源流から河口まで全て現在の金沢市域にあり、山岳地、中山間地域、郊外宅地、都心域、農工地、湾岸域、日本海と多様な自然と人との営みを存在させている。

3) バウムクーヘン都市

江戸、明治、大正、昭和、平成と460年の歴史的重層性が見える都市である。

4) 内発型都市

明治以降は中央からの外力によらず、民間人個々の力量で織維と織維機械などの新産業を起こして発展してきた。遊び続けて450年、働き続けて450年の町である。

(2) 景観行動の積み重ね

金沢は、日本初の景観条例、同じく日本初の都市美文化賞受賞などの実績を挙げてきた。現在は、県庁が移転した新市街地も含む軸状都市構造への転換と、中心市街地のメインストリートのコンバージョンによる再生を図っている。

2. パネルディスカッション

(1) 岡田宜之氏（金沢市まちなみ対策課長）

「金沢市の景観行政」

金沢市の景観関連条例は、1968年の伝統環境保存条例に始まり、1989年の景観条例、1994年の「こまちなみ保存条例」、1996年の用水保全条例、昨年2005年の沿道景観形成条例、夜間景観形成条例など、11の条例を積み重ねてきた。これらの中で建造物等への補助制度も整備してきた。今年3月には「道路標識金沢特区」に認定され、道路の案内・警戒標識の寸法と文字を縮小することにより、沿道景観および都市空間全体の魅力を向上を図る試みにも着手した。

(2) 倉田直道会員（工学院大学教授）

景観整備の意義としては、見せる、アイデンティティ等精神的統一、観光・経済面の産業的価値、快適な生活環境などがある。景観整備に

は化粧だけでなく、健康な都市づくりが必要である。そのために、以下の10の戦略を提案する。街の成り立ちを考える、水と緑を活かす、パブリック・ライフのあるパブリック・スペースをつくる、楽しく歩ける街にする、街のデザインの質を高める、多世代が安心して暮らせる街にする、環境にやさしい暮らしを可能にする、暮らしを支える機能をそろえる、起業を促す環境をつくる、街を育てる人材・組織を育成する。

(3) 鳥越けい子会員（聖心女子大学教授）

サウンドスケープ「音の風景」論から述べる。音は全方向に広がるため、ひとつひとつの音に意味があつても、全体としては騒音となる場合が多い。一方、金沢近江町市場の喧騒は、都市計画的には見落とされる場合が多いが、生活者にとっては非常に重要な音の風景である。このほか、金沢では町家から漏れ聞こえる小唄、謡曲、用水のせせらぎなど貴重な音の環境資源があり、単体の施設レベルでのデザインではなく、土木空間レベルのデザインが必要である。

(4) 德本修一会員（株総合園芸代表取締役）

かつて金沢は上を見上げて歩くまちであつたが、高層ビルが多くなり、見下ろすことが多くなった。卯辰山から見下ろす美しい家並みがマンション群で破壊されつつある。東京都をはじめ各都市ではヒートアイランド対策から屋上緑化が推進されているが、金沢では景観的視点が重要である。従来の意匠、色彩、樹種といった景観整備だけでなく、新しい切り口での景観整備がJUDIで議論されることを期待する。

3. 一般から

出席していたJUDI正会員の邑上守正武蔵野市長から、「外部の人からは良い景観でも、地元では多くの問題を抱えている場合もある。武蔵野市でも多くの良い遺伝子を見つけ出す努力をして行きたい」との発言。このほか一般から、2、3の質問があった。



フォーラム当日の様子

エキスカーション

富山新型LRTポートラムで、北前船で栄えた岩瀬地区へ

島津勝弘

Shimazu Katsuhiro

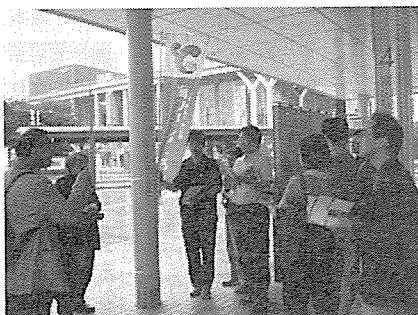
島津環境グラフィックス有限会社

今回の北陸総会での、エキスカーションツアーは会員の方々からのご要望もあり、全国的にも話題となっている、富山市の富山ライトレールに乗って、北前船の寄港地として栄え、現在町並み整備が進んでいる岩瀬を視察することになった。富山ライトレールは、赤字が続いていた JR 富山港線を富山市が譲り受け、都市整備が進む富山駅北側部分を路面化して、平成18年4月29日に超低床新型 LRT 富山ライトレールとして生まれ変わり開業を始めている。スタートしたGWなどは、かなりのお客様が訪れ、テーマパークのアトラクションの時間待ちの大行列といった感じで、乗車率も当初の予想を遙かに上回っている。視察を行った7月17日は祝日という事もあり朝から多数の家族連れなどが、ポートラムの乗車待ちをしていました。新しく路面化された工事部分は、静振軌道設計となっており視察で乗車されたJUDIメンバーもその静かさに感心され、岩瀬までの25分間の乗車を楽しめました。

2、町屋の再生整備が進む岩瀬大町通り現在ポートラムの開業がきっかけとなり、多くのお客様が岩瀬を訪れられ、町屋の整備も急速に進んでいます。岩瀬の歴史は、江戸前期の寛文年間に港町として栄え、北前船で米や木材などを大阪や江戸に運んでいました。寄港地となる岩瀬では多くの回船問屋が営まれていましたが、明治六年の大火により約千戸あった家屋の内、六百五十戸が焼失してしまい、当時全盛を迎えていた回船問屋を始めとした財力によって、岩瀬独自の家屋様式「東岩瀬回船問屋型」などの家屋として再建されました。現在の町並みは明治期に建てられた回船問屋群で、多くの先人の努力によって守られてきた、岩瀬にとっても貴重な遺産となっています。今回の視察では、岩瀬の街づくりの中心的役割をされている、地元の酒蔵「枡田酒造」の枡田専務に、今までの経緯や岩瀬の歴史、本業の酒造りまで熱のこもったお話をいただき、皆さんに美味しいお酒まで試飲させていただきました。その後は整備の窓口となる富山市の都市整備部の方々と、町屋の整備を実際に担当している大工の棟梁にも、岩瀬独特の町屋の特徴について解説をいただき、皆さんと散策をいたしました。



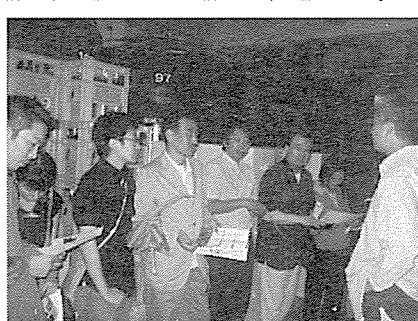
超低床 LRT 「ポートラム」 7色展開の車両。富山ライトレールは、JUDI 会員の GK 設計が中心となり地元の私共と計4社によるトータルデザインチームにより、電停から車両他すべてのデザインをトータルで行う。



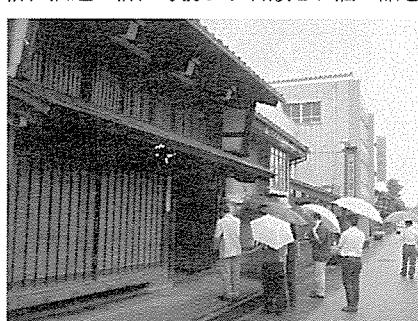
富山駅北口にて皆さんに事業の経緯を解説。



静振軌道設計にため静かで快適な車内。



枡田酒造の枡田専務より岩瀬とお酒の話を。



岩瀬の町並みを小雨のなか解説を聞き散策。

服部 圭郎

HATTORI KEIROU

代表幹事

明治学院大学

都市環境デザイン会議・第16期定例会

日時：2006年7月15日（土）12時30分～

14時

場所：石川県教育会館（金沢市）

1. 開会

代表幹事の杉山朗子氏の司会により、定足数を満たしたということで都市環境デザイン会議第16期定例総会の開催が告げられ、続いて議長に代表幹事の堀口浩司氏が、書記に代表幹事の重山陽一郎氏、作山康氏、服部圭郎氏が、議事録署名人に高原浩之氏と北原良彦氏が選出された。

2. 議事

第1号議案 新役員承認の件

選挙管理委員長の伊藤洋氏から役員選挙の結果が報告された。

1) 代表幹事・監査役の選挙結果

代表幹事は、大矢京子氏、作山康氏、横川昇二氏、堀口浩司氏、坪正浩氏、松村みち子氏、高見公雄氏、重山陽一郎氏、須永倣子氏、服部圭郎氏の以上10名が選出された。監査役は、井口勝文氏、八木健一氏の以上2名が選出された。

2) プロック幹事の選挙結果

北海道ブロックは辻井順氏、東北ブロックは渡辺敏男氏、北陸ブロックは谷明彦氏、関東ブロックは栗原裕氏、府川充氏、屋代雅充氏、山川良子氏、中部ブロックは集山一廣氏、関西ブロックは千葉桂司氏、中国ブロックは伊藤幹郎氏、四国ブロックは大西泰弘氏、九州ブロックは十時裕氏、琉球ブロックは石嶺一氏の以上13名が選出された。

第2号議案 第15期活動報告及び収支報告承認の件

第3号議案 第16期活動計画及び予算計画承認の件

3) 第15期活動報告

代表幹事の中井川正道氏より、第15期の活動が報告された。

●活動概況

総会を地方で開催するなどブロック活動を支援し、また広報に力を入れるなどの取り組みを行った。

●会員動向

第15期も入会者より退会者が多い。その結果、延べ8年で89名の会員が退会した。

●代表幹事会の活動

会員数の減少に歯止めをかけるべくJUDIを活性化させることを目的に活動をしてきた。メールを活用した情報のネットワークの強化を図るなどして情報の発信に努め、各委員会の活動も一部停滞がみられたりしたが、それらの活動の目的をはっきりとして活性化を図っていくよう代表幹事会としては検討をしてきた。

4) 委員会

●広報委員会の白濱力氏より、第15期の広報活動は、JUDIニュースの内容を充実させ、対外的にアピールできるようにするという活動の方針を打ち出すこととし、巻頭言、それから実際のプロジェクト例、また地域地域が持っている旬の話題、地域のスポットなど、そういう作品を含めて地域の特色を発表できる場を設けていくこととするとのこと。また、ホームページの拡充、メルマガでの情報提供をJUDIでは難しい点を補完する活動も展開していく予定であるとの報告があった。

●研修委員会の松本篤氏からは、15期はいったん研修委員を少なくして、検討をしていくという期にしたとの説明があった。16期は、自治体やメーカーの若い方向けの特別講習会をまた復活させ、単年度ごとの演習ではあるが、2～3年にまたがる大きな流れをもった演習を行っていきたいと考えているとの報告があった。

●事業委員会の伊藤登氏からは、15期は委員を一新し、何をするかを考えることに注力した時期であったとの説明があり、16期以降は学生と企業を結ぶ場、モニターメッセをJUDI会員からメーカーに逆に情報発信する場として捉えられないかということを検討しているとの報告があった。

●国際委員会の倉田直道氏からは、15期にはサステナブルな環境づくりということで海外において活躍していた二名による国際セミナーを実施したとの説明があった。また、海外交流ツアーを15期については「ブラジルの年環境デザイン視察」ということで8月から現地を訪問することになっているとの説明があった。16期も国際セミナー等を企画しているとの報告があった。

●美しい都市ランキング評価委員会の小浪博英氏からは、15期の評価活動は会員の協力で半分くらいが集まっており、翌日の研究会で内容は発表したいとの説明があった。16期は外部の協力者への必要経費が発生することに備えて25万円ほど計上しているとの報告があった。

5) ブロック

●北海道ブロックの柳田良造氏より、15期はJUDIの北海道ブロックで調査を委託し、開発協会からの補助ももらい、都市ランキングを実施したりしているとの説明があった。そして、16期は北海道の各地に出向き、いろいろと事業を行っていきたいと考えているとの報告があった。

●東北ブロックの渡辺敏男氏からは、16期以降に活動をひとまとめにしたシンポジウムを開催したいと考えているので、積立金として予算を使えばとの要望があった。16期では、盛岡と一戸が街づくりの都市再生本部の支援事業として決まっているので、充実した活動をしていきたいとの報告があった。

●北陸ブロックの谷明彦氏からは、毎年ブロック総会をやっているが、今回のフォーラムを今までの積立金で行ったとの説明があった。市民の目線に立ったパブリックアートプロジェクトというのを実施したとの報告があった。

●関東ブロックの小浪博英氏からは、15期はフォーラムを実施しようとしたが、次期に延期されることになり予算を積立金として回したとの説明があった。16期はキャラバン、美しい都市ランキングなど考えているとの報告がなされた。

●中部ブロックの集山一廣氏からは、毎年一回行っていたデザインセミナー、ワークショップを15期は2回行い、今までの縁越金を使ったとの説明があった。また、JUDIとして広小路ルネッサンスに参画し、都市ランキング調査、大学との交流なども行った。16期は、デザインセミナーの開催を計画し、ランドスケープ的な地域の特色をまわるということをやり、河口堰を船でわたらうと思っているとのこと。それ以外では地域市民活動の講演、大学との交流を進めていこうと考えているとの報告があった。

●関西ブロックの宮前保子氏からは、15期は都市環境デザインセミナーを8回開催し、国際セミナーとしてはブータンを訪問、さらに、毎

年秋に行っている都市環境デザインフォーラムを行ったとの説明があった。それ以外ではフォーラムの小冊子などを印刷した。16期の活動は15期とおおむね同じであるが、都市環境デザインセミナーを10回ほど実施したいと考えているとの報告があった。

●中国ブロックの伊藤幹郎氏からは、16年度は4回のイベントを考えており、歴史的景観保全ということで、10月にプロジェクトを福山の方で実施しようと考えているとの報告があった。

●四国ブロックの大西泰弘氏からは、今まで毎年、四国地域の特定の場所をみてまわることを実施し、隔年でシンポジウム、フォーラムを実施してきたのだが、15期はできなかつたので記録集を編集したとの説明があった。16期は愛媛県でシンポジウムを開催するとの報告があった。

●九州ブロックの十時裕氏からは、15期は本部の事業を中心に展開しておきており、16期も他のものに乗っていこうと考えているので、本部で何かあったらやっていこうと思っているとのこと。九州では、大学がセミナーとかをやるので、そういうものにも宿り木的に実施していきたいと考えているとの報告があった。



金沢市で開催した第16期定期総会の様子

千葉 明日香

CHIBA ASUCA

研修委員会

(株)UG都市建築

松本 篤

MATSUMOTO ATSUSHI

研修委員会委員長

アトリエ HOR

総会の翌日、7月16日（日）に石川県立生涯学習センターにて、「発表会&JUDI賞」が開催されました。発表会では研究プロジェクト1組、公募プロジェクト1組、会員から9組の方に発表していただきました。また、JUDIの会員の方はもとより、学生、一般市民の方も含め80名を超える方のご参加をいただきました。

2回目となる今回は、昨年までの経験を生かし、あらかじめ発表者の方に発表のレジュメを作成していただきました。そのため発表内容が十分に共有され、発表会は、実に活発で時間を忘れる意見交換と議論の場になりました。

全員の発表が終了したのち、JUDI賞を選定するため、会場にいる方全員に投票をお願いし、よかったですと思う発表に票を入れていただきました。それをもとにJUDI代表幹事が協議し、以下のような各賞を決定いたしました。

全国から、都市や環境にたずさわるさまざまな分野の専門家が集まるこのような発表会は貴重です。来年度も開催いたしますので、是非、今回の発表のその後の展開などはもちろんのこと、新たなプロジェクトや研究についての報告もしていただきたいと思います。そして発表会を機に、それぞれのプロジェクトがさらに前進すれば何よりです。積極的なご参加をお待ちしております。

「発表会&JUDI賞」が盛会となりましたこと、発表者やご参加の皆様、ご尽力いただきました北陸ブロックの各位に感謝申し上げますとともに、次回に向けて、ご意見、ご提案もお待ちしております。

以下に、発表の題目、発表者名、内容の概要、主な質問、JUDI賞の各賞についてお知らせします。発表会で用いましたレジュメは、ひとまずJUDIのホームページに掲載いたしますので、ご参照ください。（掲載順は受賞者順、以下敬称略）

< JIDI賞 >

○『富山港線のトータルデザイン—路面電車事業を新しい街づくりの推進力として活かす—』

宮沢 功（関東ブロック）、島津 勝弘（北陸ブロック）、富山ライトレールトータルデザインチーム

発表の概要：路面電車事業を実現にするにあたっての、トータルデザインの目的、デザインコンセプト、地域の協力体制、具体的なデザインについて

質問項目：車両設計について 富山市行政との関係について

○『地域文化を活用したまちぐあー（市場）活性化のとりくみ』

阪井 暖子（琉球ブロック）

発表の概要：中心市街地活性化の契機とな

るミュージック・イベント開催とその波及効果（ミュージックCDおよび関連グッズの商品開発）について

質問項目：地域ブランドの存在感や展開について

○『山梨県甲州市勝沼町における景観まちづくり都市計画マスターplan策定に際して農村景観重視型の土地利用計画を提案し景観まちづくりへと展開—』

屋代雅充（関東ブロック）

発表の概要：勝沼町はぶどうとワインの产地であり、それらを活かすために都市計画マスターplanで、「景観形成農地ゾーン」

「ぶどう園ゾーン」などを設け、これらを景観形成ガイドラインなどを用い、実現させる取組みについて

質問項目：まちづくりの受け皿、市民役場について 町が合併した現在の状況について

○『市民の目線に立った金沢パブリックアートプロジェクト-市民の目利きを高め、未来の旦那集を期待して-』

土田 義郎・谷 明彦・鍔 隆弘・上坂 達朗（北陸ブロック）

発表の概要：金沢のまちなかにあるパブリックアートが学生、一般市民、専門家によってどのような評価をするのかSD法を用いて検証

質問項目：評価項目について 近年の参加型アートも評価に加えてはどうか

< JUDI特別賞 >

○『富山県東岩瀬の景観まちづくりに当つて—北前船 回船問屋群のまちなみ整備とまちの活性化策の展開—』

森 傑偉（北陸ブロック）

発表の概要：路面電車事業と合わせて行われた街並修景の調査によって明らかになった、まちなみや家屋の修景手法の構築について

質問項目：街は観光重視か生活重視か 資金補助や施策などの背景について

○『富山市LRTの事業説明+VTR』

室 哲雄（富山市役所）

発表の概要：翌日のまちあるきに向けた事前説明、事業に関するVTR放映

（レジュメ、質問はありません）

< JUDI奨励賞 >

○『使われる公共空間とは—理論に基づいたアーバンデザイナー』

高松 誠治（関東ブロック）

発表の概要：「世界で一番歩きやすい、歩かせる街をつくる」ことを実現する第1弾として取り組まれた英國のトライアルガ

一広場の歩行者の動線・行動に関する提言
質問項目：景観を分析的にとらえていて評価できる 歩行者に関する他のシュミレーション方法との関連について

<受賞以外の発表内容>

○『広小路の復興プロジェクトと市民参画』

石田 匠、集山 一廣、谷口 庄一（中部ブロック）

発表の概要：名古屋の広小路通を活性化するために、地元商店街、建築系の学識者とその学生、一般市民、NPO、コンサルによってワークショップの開催による課題と方向性について

質問項目：事業所、企業などのワークショップへの参加や位置づけについて

○『登り窯を用いた地域伝統文化再生への取組みー島根県大田市水上地区を対象としてー』

寺本 和雄、伊藤 幹郎（中国ブロック）

発表の概要：新しく地域資源を復活すべく開始された登り窯プロジェクトについて
質問項目：復元だけではなく実際に活用することに期待する、今後の展開を見守りたい

○『景観へのコンセンサス形成のための色彩ワークショップー松江堀川風景デザイン塾（松江市まちづくりデザイン室・計画技術研究所企画）に参加してー』

杉山 朗子（関東ブロック）

発表の概要：堀川周辺の整備指針を検討するために開催された色彩ワークショップについて

質問項目：フィールドワークの規模やデータベースの評価軸について

○『美しい都市ランキング』

高見 公雄（関東ブロック）

発表の概要：活動の現状報告

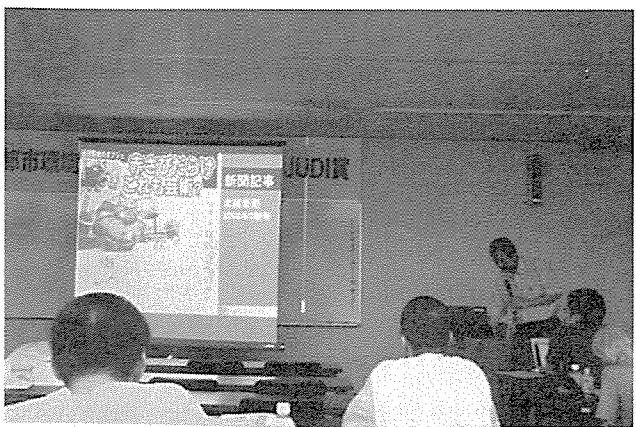
質問項目：ランキングの事例の選択や、評価の地域性、公平性について



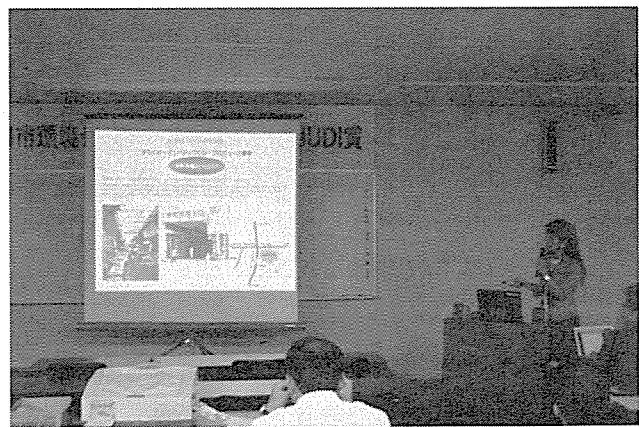
80名を超える参加者による発表会の様子



高見氏による美しい都市ランキングの発表



JUDI賞となった公募プロジェクトの「市民の目線に立った金沢パブリックアートプロジェクト」の発表



ミュージック・イベントによる中心市街地の活性化というユニークな琉球ブロック「地域文化を活用したまちぐあー（市場）活性化のとりくみ」の

1. 新会員の紹介

2006年6月～7月の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

7月31日現在の会員数は、456名です。

正会員氏名	勤務先(フック)
宮本孝二郎	鳥取県庁(中国)
鍔 隆弘	金沢美術工芸大学(北陸)

学生会員	学校名(フック)
松川 横	京都造形芸術大学大学院(関西)

2. 退会者(2006年6～7月)

及川哲、小沢健一郎、片峰美可、ホワイト・クレイグ、本郷英行、松隈実、松村博文、山口繁雄、吉成主税(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
赤瀬 達三	千葉大学工学部デザイン工学科 〒263-8522 千葉市稻毛区弥生町1-33 Tel. 043-290-3105 FAX. 290-3105
酒井 信治	(有)風景設計社 〒818-0137 太宰府市青葉台3-14-26 Tel. 092-921-6637 FAX. 921-6638
田中 寿明	(社)北海道開発技術センター 〒060-0051 札幌市中央区南1条東2-11 Tel. 011-271-3022 FAX. 271-5366
辻井 順	(株)ホルス 〒064-0821 札幌市中央区北1条西21 丁目3-32 MDビル2F Tel. 011-622-5813 FAX. 622-5814
蓑茂寿太郎	熊本県立大学 〒862-8502 熊本市月出3-1-100 Tel. 096-383-2929 Fax. 384-6765
若松 信行	(株)アトリエノルド(社名変更)

広報委員会

白濱 力	石崎 均
澤木 俊岡	伊藤 光造
土田 旭	加茂みどり
近田 玲子	河本 一行
菅 孝能	松山 茂
中嶋 猛夫	横山あおい
櫻井 淳	吉田 慎悟
松村みち子	横山 裕
島 博司	作山 康